

中等部第1回

国語

令和7年2月1日実施

50分

2025年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕・〔二〕があります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。解答は解答用紙の所定のところに書いてください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

中学一年生の要は、同級生とうまく接することができず、取り柄の無い自分に自信が持てずにいた。マンションの隣部屋に引越してきたネパール出身のサリタと少しづつ話をするようになった要は、唯一の趣味である料理を通して、サリタのことをもっと知りたいと思うようになる。

家に帰って、わたしは制服を着替えるよりも先に、台所に立った。

いつものようにビニール袋でクッキー生地をこねる。どんなに心がざわざわしていても手を動かしていると、まるで台風の目に入ったみたい、すっと心が静かになるときが来る。

無事にヤキ上がったクッキーを二種類、プレーンと、ブルーベリージャムを上から塗ったものをお皿に数枚ずつのせて、ペランダに出る。

仕切り板を軽く叩くと、すぐにサリタちゃんが顔を出した。

「あ、こんにちは」

少し間を置いて、涼やかな「こんにちは」が返ってくる。サリタちゃんはじっとわたしを見て、胸元を指差した。

「がっこう、ふく？」

しまった。制服姿のせいで、学校のことを思い出させちゃったかな。着替えてこようとしたとき、サリタちゃんが

にこりとした。

「ふく、かわいい」

「えっ？ 全然、全然そんなことないよ」

お姫さまのようなサリタちゃんにかわいいとほめられて、つい全力でヒテイしてしまう。サリタちゃんはふしぎそうな顔をして、もう一度言った。

「ふく、かわいい」

「あ、そうか。制服が、だよね、うん」

かんちがいに恥ずかしくなつて、わたしは笑つてごまかした。もしサリタちゃんがわたしと同じ中学校に転入するなら、この制服を着ることになる。白いシャツに、ブルーのリボン、同じくブルーのチェック柄のスカート。冬服に衣替えすると、この上に紺のブレザーを着る。きっと、わたしよりずっと似合うだろうな。

「今日、学校だったの。サリタちゃんは、何してた？」

「これ」

サリタちゃんを持っていたものを見て、わたしはのけぞった。

「わっ、セミ！」

体の両サイドをつままれたアブラセミが、居心地悪そうに足を A 動かしながら、たまにジジッと抵抗の声を上げる。

サリタちゃんはまるでベツトをかわいがるように、人差し指でセミの背中をなでた。

「セミ、好き？」

「すき」

「そっか。ええと、公園とかにいった方がいいと思うよ。捕まえに行く？」

「いったいい、いらない」

「あ、そうだよね」

沈黙が落ちる。でもふしぎと苦しくない。学校にいるときみたいな、しゃべらなくちゃ、というあせりもない。

二人で黙つてクッキーをかじっていると、下から小さい子の笑い声が聞こえてきた。団地の敷地内のベンチに女の子が二人で座つて、何か本を読んでいる。

「サリタちゃんも、本、読む？」

ページをめくるジュエスチャーをしながら聞くと、サリタちゃんは軽く首を左右に揺らした。これは、イエスの意味の動作だ。最近になって、だんだんわかってきた。

「よむ。がっこうの、ほん。たくさん、よむ」

「学校の本？」

学校の図書館の本ってことかな？ 首をかしげると、サリタちゃんはセミから手を離して、部屋から一冊の本を持ってきてくれた。

「べんきょうする、ほん。ネパールの」

「ネパールの、学校の、勉強する本？ これは、ネパールの教科書ってこと？」

サリタちゃんは再び左右に首を揺らして、教科書を開いた。文字は全部英語。英語の教科書かと思つたけれど、数字や数式がたくさん書かれているから、これはたぶん数学の教科書だ。

「すごい。英語で数学を勉強するなんて、すごい」

わたしはすっかり感心した。しかもサリタちゃんは、家で自分から学んでいるんだ。ネパールの子は、みんなこんなに勉強熱心なんだろうか。

「サリタちゃん、学校、好きだった？」

聞いてから、あ、と思った。サリタちゃんの表情が暗くかげる。ネパールと日本、どちらの学校を思い浮かべたのかは、聞かなくてもわかった。

「いや。いかない」

「そっか。……何が、いやだった？」

たずねると、サリタちゃんはじっと一点を見つめた。しばらく考えこんだあとで、「おひるじかん」とつぶやいた。

「お昼時間って、給食の時間？ 学校の、給食が、おいしくなかった？」

「きゅうしょく……みんな、きゅうしょく。わたし、ランチボックス」

ランチボックス、ということは、サリタちゃんは家から持っていたお弁当をお昼に食べていたのだろうか。小学生のとき、食物アレルギーのある子がときどきお弁当を持ってきていたのを、わたしも見たことがある。

「みんな、みる。わらう」

「笑う？ なんで……」

「わらう。わたし、たべる、ひとり」

怒っているようにも、悲しんでいるようにも見える表情で、サリタちゃんは小さく言った。

周りからじろじろ見られて、笑われたりしながら、一人でお弁当を食べる。

想像するだけでおなが B して、わたしはいてもたってもいられなくなった。

「サリタちゃん、ちょっと、待っててね」

「まって？ なに？」

「何かできないか、わたし、考えてみるから」

光ちゃんには頼ってもらえなかったけど、サリタちゃんの助けにはなれないだろうか。
料理と、がみババ先生の力も借りて。

ヨクジツ、わたしは図書館に行って借りられるだけの本を借り、がみババ先生のお店に向かった。

「なんだいあんだ、そんな大荷物抱えて」

「あの、これ、全部レシピ本なんです」

抱えてきた本をレジカウンターにどざりと置く。どれも、お弁当関係のレシピが載った本だ。

「お昼の時間がゆううつじゃなくなるようなお弁当って、どうしたら作れますか？」

ぴくりと、がみババ先生が片眉を上げる。

「ああ？ 弁当？」

「はい、サリタちゃんが、お昼の時間がいやだったって言ってて、じゃあお弁当で力になってあげ、痛っ」

がみババ先生はわたしの鼻先を指ではじくと、深く息を吐いて和室をあこでしゃくる。いつものように上がらせてもらって、わたしは事情を説明した。

「——で、二学期になったら、サリタちゃんに週一くらいでお弁当を渡せるように、今から練習しておきたいんです。なので、がみババ先生に教えてもらいたいんです」

「いやだね」

即答されて、わたしは面食らった。

「え？ えっ？？ なんですですか？」

「あたしが納得できないからさ」

「あの、ちゃんとサリタちゃんから話を聞いて、お昼の時間がいやだってわかったんです。本当につらそうで、だから」

「そんなのあたしにゃ関係ないね」

ひどい。わたしは唇をかんだ。がみババ先生って、こんなに冷たい人だったの？ 地域の人のための食堂には協力するのに、どうしてサリタちゃんのためには力を貸してくれないの？

こうなったら、わたし一人でがんばってみるしかない。

のろのろと立ち上がりかけると、ちゃぶ台にがみババ先生のこぶしが落ちた。

「座りな。まだ話は終わってないよ」

わたしは素早く座り直した。

「よし。じゃああなたに聞くよ。サリタには親がいるはずだね？ その親が、『子どもの弁当を自分たちの代わりに作ってくれ』ってあなたに頼みでもしたのかい？ それとも、サリタ本人が『わたしのお弁当を作って』とでも言ったのかい」

「だけれども、頼まれてないです」

④ シャツのすそをぎゅつと握りしめて、続ける。

「でも、サリタちゃんの両親はいそがしいって聞いたし、日本っぽい、ふつうのお弁当を作るのはむずかしいかもと思ってる」

「弁当にふつうとか、日本っぽさを求める理由はなんだい？」

「クラスで仲間はずれにならないように、です。みんなと同じものを食べられないうえに、お弁当をじろじろ見られたりからかわれたりしたら、ますます苦しくなっちゃうから」

「食べられないんじゃないかって、食べないんだろうねえ」

がみババ先生はにやりと笑った。

「あなた、だれの味方してんのさ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

そんなの、決まってる。わたしは最初から、サリタちゃんの味方……なのに。

「周りどちがうからって仲間はずれにしたり、からかったりするやつらのほうが、どう考えたっておかしいだろ。なのになんでそいつらに合わせてやらなきゃならないんだい」

わたしはうつむいた。がみババ先生の意見は正しい。でも、わかってない。学校で、教室で、少数派になってしまふことの心細さを。仲間の輪から外されてしまわないように、わたしたちがどれだけ神経を使って日々を過ごしているかを。

大人は、どうして忘れてしまうんだろう。それとも、強い人にはわからないの？

「納得できないって顔だね。じゃあ百歩譲^{ゆず}って、あんたが週に一回、サリタの弁当作りを引き受けたとしよう」

「はい」

「それ、何年間続けるんだい？」

何年？ え、年……？

「週に一回とはいえ、弁当作りは大変だよ。前日までに何を作るか決めて、材料を買って準備して、朝早く起きて調理する。前日の晩の仕こみが必要にもなるかもね」

淡々と、がみババ先生は続ける。

「しかも、ただ調理するんじゃないよ。昼まで傷まないか、持ち運びの最中に汁漏れしないか、サリタの食べないものが入ってないか注意しつつ、味と見た目にも気を配って作るんだ。材料だってただじゃないし、手間もかかる。神経も使う」

「……はい」

「それであんたが『もうむりだ』って弁当作りを途中で止めたら、相手はどう思うだろうね」

サリタちゃんの気持ちになって、想像してみる。怒るかもしれないし、悲しむかもしれない。突き放されたと思ってしまうかもしれない。

心に余計な傷を、つけてしまうのかもしれない。

「そもそもね、あんたがむりして作った弁当を、サリタは心からおいしく食べられるのかい？」

⑤はっとした。そして、うなだれる。

恥ずかしかった。

サリタちゃんのことを思いやっているつもりで、本当に『つもり』だったんだ。

顔が、上げられない。がみババ先生は短いため息をつく、わたしが持ってきた本の山をぼんと軽く叩いた。

「一つ、宿題を出そうか」

「宿題？」

「ああ。サリタといっしょに料理をしてもらん。作るのはお互いの食べたいもの。作るときは家の人に協力を頼んでもよし。まずは二人でよく話して、作りたいものを決めて、あたしに報告しな。作りかたはあたしが教える」

突然、どうしたんだろう。その意図がわからずにいると、がみババ先生は近くの紙を引き寄せ、二つの漢字を乱暴に書き付けて、言った。

「『友』は、『共』からだよ」

(落合由佳 『要の台所』 講談社)

※学校のこと……サリタは日本の学校で嫌な思いをしてから、学校に行かず家にこもる生活をしている。

※光ちゃん……中学校での、要の唯一の友だち。要は普段と違って元気のない光を心配し、話を聞こうとしたが、はぐらかされてしまった。

※がみババ先生……料理教室の先生。要はサリタと仲良くなれるよう、料理をはじめ、いろいろなことを教わっている。

問一 線部 (a) (c) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 A、B に入れるのに適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア もぞもぞ イ こつこつ ウ どんどん エ すたすた オ きりきり

問三 —— 線部①「まるで台風の目に入ったみたいに」とありますが、ここに用いられている表現技法としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法 イ 比喩 ウ 体言止め エ 反復法 オ 倒置法

問四 —— 線部②「サリタちゃんの表情が暗くかげる。」とありますが、それはなぜだと考えられますか。六十字以内で具体的に説明しなさい。

問五 —— 線部③「面食らった。」とありますが、「面食らう」の本文中の意味としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 衝撃を受けて絶望する。
イ 不意の出来事に驚きとまどろつ。
ウ 受け入れられず怒りを覚える。
エ 相手の態度にあきれる。
オ 相手を恐れておびえる。

問六 —— 線部④「シャツのすそをぎゅっと握りしめて」とありますが、このときの要の心情や様子の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア がみババ先生の言葉に応じつつも納得がいかず、自分なりの考えで反論しようとしている。
イ 自分の言い分を聞き入れないがみババ先生に対していら立ち、不機嫌さを態度で示そうとしている。
ウ ここであきらめてしまつてはもうサリタを助けることはできないのだと考え、焦っている。
エ 恐ろしいがみババ先生の言葉や態度におびえ、逃げ出したい気持ちを必死でおさえこんでいる。

オ がみババ先生に自分の考えを理解してもらえないことがわかり、ふてくされている。

問七 —— 線部⑤「はっとした。そして、うなだれる。」とありますが、このときの要の心情を六十五字以内で説明しなさい。

問八 本文中の~~~~線部からは、「がみババ先生」がどのような人物であることがわかりますか。適切なものには○、適切でないものには×で、それぞれ答えなさい。

ア 「深く息を吐いて和室をあごでしゃくる」「ちゃぶ台にがみババ先生のごぶしが落ちた」など、威圧的な態度を取ることで相手よりも優位に立とうとする、勝気な人物。

イ 「いやだね」「あたしが納得できないからさ」など、子どもを相手にしているにも関わらず、自分の思っていることを隠さずにきっぱりと伝える、潔い人物。

ウ 「がみババ先生はにやりと笑った」のように、怒ってばかりではなく時には優しい笑顔を見せる、表情豊かな人物。

エ 「サリタといっしょに料理をしてごらん」「作りかたはあたしが教える」など、要をただ叱るのではなく、意思をくみ取り手伝おうとする、思いやりのある人物。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

ときどき注文をまちがえてしまうかもしれません。どうかご承知おきください。そのかわり、どのメニューもここでしか味わえない、特別においしいものだけを揃えました……。こんな風変わりなレストランがあるそうです。その名も、「注文をまちがえる料理店」。

お客さんからのオーダーを間違えてしまうって、いったいどういうことでしょう。実は、ホールで働くスタッフの多くは、認知症の方々なのだとか。お客さんのところに、注文したのとは違う料理が運ばれても、「こつちもおいしそうですし、まっ、いいかあ……」と、そのことを受け入れ、楽しんでしまう。このゆるい雰囲気はとても心地よさそうです。

これまでレストランといえば、どこかキリッとした緊張感がありました。お料理をテーブルに並べる所作にも、その調理に対しても、プロの技を期待します。サービスを受けるわたしたちもドレスコードなどに気を使い、ちよつとだけ襟を正している。そんな張りつめた場所だったように思います。

ところが「注文をまちがえるかも」と、ほんの少しスタッフたちの「弱さ」をさらけ出してみたら、お店の中のモードが一変すること……。スタッフの丁寧な応対に感謝しながら、お料理を受け取る。偶然の出会いを楽しみむように、まちがって運ばれてきた料理をありがたくいただく。その懸命な仕事ぶりをねぎらいつつ、片づけに思わず手を貸してあげる。お互いの立場を越えて助け合い、みんなが一つになって、「しなやかなシステム」を作りあげるのである。これって、なんだか懐かしい光景にも思われます。

もう一つ、このところのファミリールレストランなどでも、同じような光景を目にするようになりました。例の「猫の顔をした配膳ロボット」の活躍です。

まだ拙い所作ながら、ホールの中をコトコトと動きまわり、お客さんのところにお料理を運ぼうというのです。ただしロボットの仕事はそこまで。肝心のテーブルへの配膳は、そこに座っているお客さんに手伝ってもらいます。このちゃっかりぶりは、とてもほほえましくもあります。そうして、わずかに愛嬌をふりまくようにして、また厨房へと帰っていくのです。

ここで興味深いのは、お客さんどこか満足げなところでしょう。お手伝いする子どもたちの様子をやさしく見守るように、思わず寄り添ってしまいます。と同時に、お店の中の雰囲気も変えつつあるように思えます。ホールの中でロボットたちは他のロボットやお客さんにつつかることなく、淡々と動き回っています。これを可能とするのは、ロボット側のセンサーの働きというより、お客さんが道を譲ってくれるからなのでしょう。

わたしたちにも苦手とするところはたくさんあります。こんなたくさん料理を一度に運ぶことは出来ませんが、お店のことも、厨房の中もよく知りません。そうであるなら、通行の妨げにならないように通路を譲ってあげる、配膳の一部を手伝ってあげるなど、自分たちの「強み」を生かせる範囲で貢献しあえばいいわけです。

こうして考えてみると、この配膳ロボットなども「弱いロボット」の一つといえそうです。このロボットの不完全さや弱さは、わたしたちから「ひとらしさ」や「仕事」を奪うのではなく、むしろ「ひとらしさ」を呼び起こしてくれるのです。

とても素朴な道具であるハサミなどの場合はどうでしょう。

ハサミはただ机の上に置かれただけでは、本来の機能を発揮できません。わたしたちの手の手の中であって初めて、紙を細かく切り刻む、布や糸を断つなどの機能が立ち現れてきます。その意味で、ハサミはわたしたちの手の働きを必要とし、その自在に動く柔らかな手がハサミの「弱さ」を補っているのです。

一方で、わたしたちの柔らかな手では、堅いひもなどを断つことは出来ません。手の柔らかさ（＝弱さ）は、ハサミの硬い鋼の手助けを必要とし、そこではハサミの「強み」を引き出しているのです。それと同様で、ハサミの「弱さ」は、わたしたちの手に備わる柔らかさを、今度は「強み」に変え、それを引き出していたのです。

※「えっ、なんだか混乱してきた！」

「でも、ハサミが手の弱さを補うところまでは、よくわかる」

「まあ、それが道具の使命だからね……」

「で、ハサミの弱さを手が補っている。そうか、このあたりが微妙なんだ……」

「ハサミにも弱さがあるって、考えたこともなかった！」

「それと、手の弱さがある間の間にか強みに変わるって……」

「言葉遊びがすぎるんじゃないの……」

X 素朴な道具とのかかわりでは、お互いになんらかの「弱さ」を抱えつつも、その協働によって、とてもしなやかな関係性を作りあげるようです。このとき、お互いの「弱さ」は消えて、もはや見えないものに。ただ、それぞれの抱えていた「弱さ」は、お互いの間でしなやかな関係性を生みだす「のりしろ」として、その背後でしっか

りと機能しているようです。

素朴な道具がまだ世の中から淘汰されず、むしろ重宝(a)されているのは、こうした理由からなのでしょう。

これらの道具にくわえ、この頃では、いろいろと便利なシステムや家電製品、高機能なロボットなどが登場してきました。家の中だけでも、洗濯機や冷蔵庫、食洗器、ガス給湯器、お掃除ロボット……、わたしたちの暮らしの中で、すでに欠かせないものになっています。厄介な仕事を任せることが出来れば、自分のことにセンネン(b)できます。その方が効率的で、暮らしも豊かになるというわけです。

Y 〈〇〇してくれるシステム〉と〈〇〇してもらう人〉と、その役割の間に線が引かれた途端に、その関係はちよつと微妙なものになってはいないでしょうか。わたしたちはなにも手が出せず、ただやってもらっただけです。その間に距離が生まれることから、相手に対する共感性も薄れ、「もつと、もつと」と要求をエスカレートさせてしまうようです。たとえば、洗濯機はとても便利なものですが、それが当たり前になると、「もつと静かに！」「もつと早く！」「もつとキレイに！」と願ってしまいます。それに応えようとメーカーも量販店も、「この製品には、こんな新しい機能がついてるんです！」とのアピールを怠りません。そして、「同じような値段なら、この新機能がついたものの方がいいかなあ」と思わず手にしてしまおう。これが繰り返されると、使われそうもない機能がどんどん追加され、消耗戦になってしまおうです。『誰のためのデザイン？』（新曜社、一九九〇年）の著書で知られるドナルド・ノーマンが、「なし崩しの機能追加主義」として指摘したことです。

暮らしの中に入り込みつつあるロボットたちはどうでしょう。「完璧に仕事をこなし、賢くて便利！」、そんな期待に応えようと、「ひとりのできるもん！」とちよつとばかり強がってしまうようです。けれども、期待と現実と

の間にはまだギャップがあります。

ロボットがゴミを積み上げるにも、モタモタしてしまう。お料理を運ぼうとして、ときどき、粗相してしまう。そんな姿に、「ちゃんとして！ どうして、こんなことが出来ないの？ あなたはロボットでしょ！」と思わず叱りつけたくなることも……。わたしたちは、いつ頃から、こんなに不寛容で傲慢になっていたのでしょう。

このことは、人とロボットとの関係に限られません。先ほどのレストランなどでも、「料理やサービスを提供する人」と「サービスの提供を受ける人」と、その役割の間に明確な線が引かれると、「もっと温かいうちに！」、「もっと丁寧！」、「もっとおいしい料理を！」と、その要求水準を高めてしまうようです。いわゆる、カスタマーハラスメントなどは、その延長にあるものでしょう。

学校の授業では、どうでしょうか。先生たちは懸命に講義内容を準備して、丁寧な資料を提供しようとしています。ところが一部の学生からは、「もっと大きな声で！」、「もっとわかりやすく！」、「もっと丁寧！」との声も聞こえてきます。それに応えて至れり尽くせりの努力を続けるも、むしろ逆効果なのかもしれません。学生はどこか受動的になり、豊かな学びを生みだしくなっているようなのです。

（岡田美智男『〈弱いロボット〉から考える―人・社会・生きること』岩波書店）

※ドレスコード……その場所・時などに適切とされる服装の規定。

※襟を直す……気持ちを引き締めて物事に当たる。

※〈弱いロボット〉……筆者が長年研究をしている、周りの人の助けを借りないと何もできないロボットのこと。

※「えっ、なんだか混乱してきた！」……筆者はロボット研究において、このように仲間と雑談のような話し合いをしながらアイデアを膨らませている。

※淘汰……不要なものをとり除くこと。

※粗相……不注意や軽率さからあやまちをおかすこと。

※不寛容……心がせまく、人の言動を受け入れられないこと。他の罪や欠点などをきびしくとがめだてすること。

※傲慢……おごりたかぶって人を見下すこと。

問一 線部 (a) (b) のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 X、Yに入る語として適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア むしろ イ だから ウ ところが エ なぜなら オ このように

問三 線部①「『しなやかなシステム』とありますが、それを作りあげるものについての説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 緊張感のある場で、スタッフの所作や調理といったプロの技に期待すること。

イ ここでしか食べられない特別なおいしいメニューを、安く提供すること。

ウ お店で働くスタッフが、それぞれの「弱さ」をさらけ出すこと。

エ できないことは無理をしないが、できるだけ完璧な応対を心掛けること。

オ お客さんがスタッフの仕事ぶりをねぎらい、それに見合ったお金を払うこと。

問四 ——線部②「むしろ『ひとらしさ』を呼び起こしてくるのです。」とありますが、「配膳ロボット」に対する「ひとらしさ」の具体的な行動を、本文中から二種類、一つは二十五字以内、一つは十五字以内でそれぞれ抜き出して答えなさい。

問五 ——線部③「ハサミの『強み』を引き出している」とありますが、どのようなことですか。分かりやすく説明しなさい。

問六 ——線部④「要求水準を高めてしまう」とありますが、人やロボットに限らず、なぜそのようなことが起こったと筆者は考えていますか。六十字以内で説明しなさい。

問七 次を示す【資料】は、本文より後で述べられている文章です。これを読んで後のⅠ、Ⅱの問いに答えなさい。

【資料】

至れり尽くせり……、相手のために、すべてのことをやってあげる。この「相手のために！」と尽くしすぎる行動は、むしろ相手の **A** や「人らしさ」を奪ってしまう側面もあるのです。そうしたこともあり、モノやシステムとのかかわりでも、これまでの「利便性」一辺倒の価値観を見直してみようというわけです。

その一つのヒントは、「コンヴィヴィアリティ (conviviality)」という言葉にありそうです。もともと「和気あいあいと食事を楽しむような雰囲気」を指す言葉で、「ともに (con-)・生き生きとした (vivial)」の意から、「自立共生的なかわり」、「共愉的なかわり」と訳されることもあります。先に「注文をまちがえる料理店」のところで述べたように、「お互いの立場を越えて助けあい、みんなが一つになって、その場を盛り上げている」、そんな雰囲気かと思われます。そうした中でお互いは、「自らの能力が十分に生かされ、そこで生き生きとした幸せな状態」を指す、ウェルビーイング (well-being) をアップさせているようなのです。先のハサミの場合は、どうでしょうか。わたしたちの柔らかな手の

中であって、ハサミに新たな機能や役割が立ち現れます。と同時に、それを巧みに使いこなす者として、使い手であるわたしたちも新たに価値づけられます。ハサミが潜在していた能力を引き出してくれているのです。

あるいは、初めてクルマのハンドルを握り、アクセルを踏みこんだときに、とてもドキドキ、ワクワクしました。すぐに自在に操れるようになり、ロングドライブの後には、ちよつとした達成感や有能感も覚えたことでしょう。クルマはわたしたちの身体の一部となって、その機能を拡張してくれます。これはとても幸せなことであり、また街や道路と一体となった感覚はとても心地よいものでした。

ハサミとのかかわり、そしてクルマの運転。先ほどのイリイチの指摘に従えば、これらは「コンヴィヴィアリティのための道具」の一つであり、わたしたちのウェルビーイングをアップさせるのに、一役買っていたわけです。

※一辺倒……ある方向だけにかたよること。

※先ほどのイリイチの指摘……思想家のイヴァン・イリイチは、人間はさまざまな道具を手に入れることで自らの能力を拡張させることができたが、次第に利便性の高い道具やシステムに頼るなかで、いつの間にか、道具に使われる存在になつていたと指摘している。

Ⅰ **A** に入る語としてもつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 合理性 イ 客観性 ウ 具体性 エ 主体性 オ 平等性

II

~~~~線部「ウエルビーイング (well-being) をアップさせている」とありますが、以下の会話文を読み、例としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア (生徒A) …「美化活動のボランティアでは、得意な窓ふきを担当していたんだ。苦手な花壇かたんの手入れは、植物に詳しい友達にしてもらっていたけれど、コツを教え合いながら一緒に作業していたら楽しくなって、いつの間にか二人ともそれぞれの作業が上達したよ。」

イ (生徒B) …「私も最近、新しいことにチャレンジしようと思って、一輪車に乗る練習をしていたの。でもなかなか上手くいきなかつたので、インターネットで上手な人の動画を検索けんさくしてみたんだ。そうしたら思ったよりもたくさん見つけることができて、驚おどろいたよ。」

ウ (生徒C) …「一輪車かあ……私は乗れないけど、別に困らないな。一輪車よりも早い乗り物はたくさんあるし、自分でバランスをとってこぐのはつかれるし大変だよ。それよりもAIがすべて操縦してくれるような未来の乗り物がはやくできてほしいなあ。」

エ (生徒D) …「うーん、AIがすべてやってくれるのは便利だけど、それでいいのかなあ。花壇の手入れや窓ふきができるロボットだって作るのは可能だと思うけれど、他人やロボットに頼らず、自分の力で何でもできるようになるのが楽しいと思えるんだよ。」



